韓国における概念史研究の現状と展望

許洙

はじめに

概念史は概念を分析単位として捉え、概念が政治・社会的現実とどのような関係を持ち、その意味がどのように形成され変化するのかを明らかにするものであり、近代社会の特性を解明する歴史研究の一分野である。概念史研究は、ドイツのラインハルト・コゼレック（Reinhart Koselleck, 1923–2006）をはじめとするヨーロッパの学者たちが方法論を築き、研究を重ねてきた。これらの研究に刺激を受けたヨーロッパ以外の国でも、自国の経験を反映した概念史研究が行われている。

韓国では、1990年代の初めに、韓国の近代性（modernity）の省察という問題意識の下で近代的概念の形成に注目した研究が行われ始め、資本主義世界システムの周縁に編入された韓国の近代的経験を分析する研究が本格的にスタートした。その過程で、ヨーロッパにおける概念史研究が大きな影響を与えたといえる。本稿では、検討対象を「韓国の近代的概念を扱う研究」と包括的に設定しながらも、「韓国の近代の経験を反映した主体的な概念史の研究方法論の確立」という観点から先行研究を検討することにする。[1]

1　時期別の現状と展開

韓国での「概念史」研究は、1990年代の初めに端を発し、学問分野や研究テーマ、対象時期などを徐々に拡大してきた。まだ研究が始まってから四半世紀に満たないが、大まかには次の三つの時期に分けることができる。

第一期は2000年以前であり、近代的「宗教」概念と「文学」概念を考察する先駆的な研究が行われた（張錫萬 1992、黄鍾淵 1997）。すでに1986年に、国内の西洋史学者がコゼレックの概念史研究を紹介し（李相信 1986）、その後コゼレックの著書が翻訳されたが（コゼレック 1996）、張錫萬と黄鍾淵の研究には、ドイツ概念史研究の直接的影響は見られない。また、一部では概念史研究に注目した共同研究もなされたが、いまだ国際政治学分野のセミナーなどにとどまっていた。

1　韓国における概念史研究の動向を包括的に整理した先行研究は、以下の通りである。キム・ヒョンジュ（2007）、朴相燮（2009）、キム・ジヨン（2010）、李幸勳（2011）、梁一模（2011）。個別研究の成果や特定の研究分野を扱った研究としては、以下のものがある。金學頤（2009）、韓承完（2010）、尹海東（2010）、姜鎔勳（2012）。

第二期は2000年から2007年までである。この時期は、開化期（1876–1910年）を対象として行われた共同研究の成果が、国際政治学と文学の二つの分野からそれぞれ発表された。国際政治学分野では、コゼレックの概念史研究の方法を積極的に受容し、開化期の主要な概念が研究された[2]。西欧からの近代概念の伝播とその受容に焦点を当てながらも、伝統的な概念との緊張関係や相互の接合などを重視したのが特徴である[3]。また、文学研究者を中心として、他の人文学・社会科学分野の研究者も参与した共同研究グループは、開化期の概念に関する一連の研究成果を生み出した（梨花女子大学校韓国文化研究院 2004、2006、2007）。ドイツ概念史研究の方法論やこれを活用した国際政治学分野の研究成果を意識してはいたものの、韓国の近代性の解明という包括的な問題意識に基づき、様々なアプローチを試みたことが特徴である[4]。一方、この時期になると、ドイツ概念史研究も本格的に普及し、共同研究にも多大な影響を与えた（羅仁昊 2002、2005、2007）。

第三期は2008年以降である。この時期には、ドイツ概念史をはじめとする国際概念史学界の理論的・経験的研究成果が本格的に知られるようになり（朴根甲他 2009、リクター 2010、羅仁昊 2011）、様々な学問分野の研究成果が発表され、国際的な学術交流が盛んになるなど、国内における概念史研究の基盤が拡大した。このような研究の加速化には、とりわけ2007年末から人文韓国（HK）の支援を受けた翰林大学校翰林科学院の役割が大きかった[5]。「東アジア基本概念の相互コミュニケーション事業」を10年プロジェクトのアジェンダ（agenda）として捉える翰林科学院は、概念史専門の学術誌『概念とコミュニケーション』を創刊し、主要概念に関するモノグラフを収載する「韓国概念史叢書」を発刊した[6]。さらに、コゼレックの『概念史辞典』（*Geschichtliche Grundbegriffe*）の主要項目をはじめとする国際的水準の概念史研究に関する書籍も翻訳・出版している[7]。

2　崔丁云（2002）、河英善（2002、2004）、金錫根（2002）、金榮鎬（2004）、金容稙（2004）、朴相燮（2004）、孫洌（2004）、申旭熙（2004）、李憲美（2004）、張寅性（2004）、鄭容和（2004）。

3　国際政治学分野の研究者たちは、『世界政治』25–2（ソウル大学校国際問題研究所、2004年）で概念史について多くを述べている。ここで研究者たちは、概念史に関する序説に加えて、「主権」「富国強兵」「勢力均衡」「民主主義」「経済」「英雄」に関する概念史の研究成果を発表し、これらを、以前に発表した「文明」「権力」「個人」などに関する研究と合わせ、後に単行本として発刊した（河英善他 2009参照）。

4　この研究シリーズでは、『独立新聞』『皇城新聞』『大韓毎日申報』など開化期の新聞を主な資料として、語彙使用頻度などの概念分析に積極的に活用している。この時期の文学については、キム・ヒョンジュ（2007）が詳しく扱っている。

5　人文韓国（Humanities Korea）事業は、人文学の振興のため、韓国政府が韓国研究財団を通じて国家予算を供出し、人文学関連の研究所と研究人材を養成しようとするものである。韓国研究財団は、この事業への参加を申請した研究団体の研究計画書、所属大学の支援状況、施設・人材の構成と適合性などを総合的に評価し、支援研究所を選定する。選定された研究所は、10年間の支援を受けることができる。2007年から始まった人文韓国事業で、現在までに支援を受けている研究所は、人文分野一般・地域研究を合わせて42ヶ所である。翰林科学院は、事業初期の2007年末に支援研究所に選定され、2017年まで毎年8億ウォンの支援金を受けることになっている。

6　これまでに、『万国公法』『国家・主権』『憲法』『国民・人民・市民』『民族・民族主義』『文明』の6冊が出版されており、「文学」「帝国」「宗教」をはじめとする25項目は現在執筆中である。

7　翰林科学院では、『文明と文化』（*Zivilisation/Kultur*）（ピーシー 2010）、『進歩』（*Fortschritt*）（コゼ

この時期には、共同研究・個別研究の両面から、開化期だけでなく植民地期も包括する研究成果が多数発表され[8]、朝鮮後期の意味論的変化に注目する研究も行われるなど、研究の対象時期が拡大していった。さらに、「主体的概念史」を研究すること、そのための方法論を模索する必要性などが提起された[9]。

2　課題別の現状と検討――周縁性と通時性

韓国の概念史研究は、ヨーロッパや中国、日本などに比べて遅く始まったが、短期間のうちに研究のインフラ構築や研究成果の量的拡大を成し遂げたという点から、一定の成長をうかがうことができる。今後、独自の研究方法論の確立を通しての質的な発展を遂げるためには、以下の二つの課題についての本格的な議論が必要である。この章では、これらに関連する既存の研究を挙げ、具体的に検討する。

2-1　周縁性の把握

まず、近代韓国の「周縁性」を意味論的に把握しようとする多様なアプローチに注目し、そこに内在する問題意識を積極的に収集・発展させる必要がある。

近代韓国が置かれている周縁性に着目し、これを概念史として把握しようとする努力は、国際政治学者によって本格化された。韓国は世界的に見てかなり遅れて開港（1876年）し、近代民族国家として発展する機会をつかめず、日本の植民地となった。このような事実について河英善は、概念史的観点から、「近代韓国は主権国家という基本概念に内在する強大国性を十分に認識することができず、その結果、近代政治の舞台で地位を勝ち取ることができなかった」と述べている（河英善 2009: 35）。また、「近代西洋概念の導入史として概念形成史にアプローチするのではなく、伝統的概念の挫折を経て、伝統と近代の複合により形成された新概念の歴史として整理する必要がある」という課題を提示している（河英善他 2009: 9）。朴相燮も同様の立場から、「韓国は中国と日本が受容した西洋の政治・社

レック、マイオ 2010）、『帝国主義』（*Imperialismus*）（ピーシー、クロー、バルター 2010）、『戦争』（*Krieg*）（ヤンセン 2010a）、『平和』（*Friede*）（ヤンセン 2010b）を翻訳・出版している。また、『啓蒙』（*Aufklärung*）、『解放』（*Emanzipation*）、『危機』（*Krise*）、『近代・近代性』（*Modern, Modernität, Moderne*）、『革命』（*Revolution*）、『改革』（*Reform*）、『保守主義』（*Konservativismus*）、『自由主義』（*Liberalismus*）、『無政府主義』（*Anarchie*）、『労働／労働者』（*Arbeit/Arbeiter*）の翻訳が完了間近であり、まもなく単行本が発刊される予定である。

8　翰林科学院の2010年度定期シンポジウムでは、「概念から見る植民地的日常のモダニティ」というテーマで、「流行」「大衆」「破産と有産者」「奇怪・怪奇」「郷土」などの概念が取り上げられた（詳しくは、翰林科学院ホームページ「学術活動」メニュー内の「シンポジウム」の「第3回人文韓国事業（HK）シンポジウム」を参照）。個別の論文としては、植民地期の「趣味」「民謡」を扱った研究などが発表されている（文京連 2011、林慶花 2012）。

9　羅仁昊の著書（羅仁昊 2011）や朴相燮の論文（朴相燮 2009）などで提起されている。特に羅仁昊は、ドイツ概念史研究の方法論を国内に紹介しながらも、それらを韓国の状況に合わせて批判的に扱わねばならないと述べている。本稿で「主体的な研究方法論」という場合、これと同様の立場をとる。

会概念を再受容した。にもかかわらず、国権を喪失していたため、独自の受容はほぼ不可能だった」と述べている（朴相燮 2009: 258–59）。

このような国際政治学者の見解は、19 世紀の文明史的変化にうまく対応することができなかった過去を深く反省し、再び転換期を迎えた今日の韓国において、伝統と近代の経験を反映する新しい概念を模索しなければならないという問題意識を先導的に提起する点に、大きな意義がある。これらは主にコゼレックの概念史研究を積極的に受容しながら、「ヨーロッパにおける近代国際秩序の基本概念」や「政治・社会概念」に焦点を当て、開化期の概念の伝播と意味形成過程について研究したものである。

一方、概念史研究は文学・歴史・哲学、その他の社会科学分野に拡散し、対象とされる概念の種類が多様になり、分析時期も植民地期などへと拡大していった。これに関連して、最近の概念史研究は、次の二つの系統に分けることができる。一つ目の系統として朴贊勝は、韓国では、「国民」ではなく「民族」概念が 1910 年代末から 20 年代にかけて普及したことを明らかにしている（朴贊勝 2010: 10、85–102）。許洙は、植民地期に「民衆」「大衆」が、主に「運動的主体」に関連する意味で使われた様相を明らかにしている（許洙 2011a、2011b: 304–305）。これらの研究を通して、主権を喪失していた植民地期においても、政治・社会的概念は活性化していたことがわかる。

二つ目の系統は、開化期および植民地期の歴史を概念史として把握するための、基本概念研究をはじめとする様々なアプローチである[10]。韓国文学研究者の柳浚弼とキム・ヒョンジュは、既存の韓国概念史研究がその標榜に反して、「実際には言語的表現にほとんど目を向けていない」と批判し（キム・ヒョンジュ 2007: 232）、開化期と植民地期の「独立」「社会・世論」概念とその用法について、特に修辞学（rhetoric）に着目して分析している（柳浚弼 2004、キム・ヒョンジュ 2005）。キム・ジヨンはそこから一歩進んで、「歴史と政治の主流から除外された概念群、さらにイデオロギーによって看過された生の領域を表現する言語に焦点を当てる「日常概念研究」」の必要性を強調している（キム・ジヨン 2010: 496）[11]。さらに朴根甲は、コゼレックの概念史研究と補完・緊張関係にあるハンス・ブルーメンベルク（Hans Blumenberg）の隠喩学を活用し、韓国近代歴史学の基礎を築いた申采浩の「歴史」概念を分析している（朴根甲 2011、2012 参照）。それによると、申采浩の「歴史」は、「時間と運動の契機であり、一つの近代的概念世界をなす」ものだが、歴史家の任務を「画家が絵を描く行為」と喩えたことに表れているように、申采浩の関心は、「屈折のない鏡」としての伝統的概念に向かったといえる（朴根甲 2011: 191–97）。

10　ここで述べる「基本概念」とは、コゼレックが言う「歴史の運動を先導する概念」であり、「公的議論や論争において頻繁に使われ、政治・社会・イデオロギー的闘争と葛藤の場として機能した概念」を意味する（羅仁昊 2011: 71）。

11　これに関連して、翰林科学院では、「韓国概念史叢書」とは別に「日常概念叢書」の刊行を企画し、「日常生活において包括的に意味の伝達力を持つ語彙、東アジア文化圏で固有の意味と価値を持ち、改めて評価されるべき語彙、政治的・社会的困難を解決し、未来をつくる語彙」を見出そうとしている。現在、「恋愛」「病」「幸福」「教養」「児童」「趣味」の 7 項目が執筆中である。日常概念に関する議論については、コ・ジヒョン（2010）を参照。

2-2　通時的アプローチから注目すべき時期

次に、19 世紀末の「西洋の衝撃」を韓国の近代的概念が形成された直接的な契機と見なしながらも、外来の概念への対応や、その定着過程から見出される韓国近代概念の特性を十分に解明するためには、19 世紀末～ 20 世紀前半の歴史に加えて、17 ～ 18 世紀の概念の変化や「解放」（1945 年 8 月）以降の変化にも目を向ける必要がある。

上で述べたように、韓国近代の周縁性を反映するために様々な試みが行われたが、これらのほとんどがコゼレックの基本概念研究を批判または補完するものであった。歴史的意味論としての概念史が追究する政治・社会的基本概念に対する通時的アプローチの重要性が減少するわけではないが、コゼレック辞典の「進歩」項目を読んで受ける印象は、長期的な意味の変化が軽快に滑るのを眺めるような感覚である。これは、コゼレックの緻密な分析と構成戦略・仮説が一つの体系を持っているからである[12]。西欧からの近代概念の伝播とその衝突、変容と受容が際立つ東アジアにおいて、特に中国と日本を通した二重の受容が支配的だった韓国の場合、いかなる通時的研究戦略を立てるべきなのだろうか。

結論から言えば、西欧近代概念の伝播・衝突による意味論的変化と断層を重視しながらも、このような変化と断層を韓国史の通時的な意味変化の中で把握し、それに関連する内容を適切に配置する叙述戦略が必要である。なぜなら、西欧の近代概念の伝播が衝撃的であったとしても、以後の意味展開においては、西欧の概念に内在する意味だけでなく、当時の韓国の社会・歴史的状況や、その概念に直接・間接に関係する伝統的な考え方などが複合的に影響を与えたからである。さらに、このような過程を経て生み出された韓国近代の概念こそが、単なる西欧近代概念の移植ではない、韓国近代の経験を反映した意味としての特性を持つことができる。例えば、張寅性は、ヨーロッパ近代国際体制の主要原理である「勢力均衡」（balance of power）概念が韓国に伝播した際、韓国人が、西欧の権力志向的「勢力均衡」概念を、規範的性格が強い「均勢」に置き換えて理解しようとしたという。この置き換えの背景には、「自然や政治の均衡状況に対する既存の概念」、すなわち「規範でもって権力を規律しようとする儒教的政治観の影響」と、「小国朝鮮の脆弱な国際政治上の立場と、自由・独立への意地」があったという（張寅性 2009: 182-83）。不完全な一般化は禁物だが、このような規範性とそれによる現実批判は、「脆弱な国際政治的位相」と「植民支配」を経験した近代韓国の概念と歴史的現状を特徴づける重要な指標にもなりうる。

一方、通時的な意味の変化に関連して、最近二つの指摘がなされた。一つは韓国における概念史研究において、17 ～ 18 世紀が持つ意味を問うものである。李坰丘は、既存の概念史が「西欧概念の導入とその政策史に陥る危険性」を持つと警告し、西欧近代との接触以前にあった意味の変化の重要性を強調した。それによれば、18 世紀に登場した「経世致用・利用厚生」の概念は、性理学的用語に分類されるとしても、新しい思惟を内包する

12　李眞一は、翰林科学院で翻訳されたコゼレック概念史辞典の 5 項目のうち、「進歩」と「文明と文学」が、コゼレックの「Sattelzeit」（谷間期）という仮定を最も忠実に表していると述べている（李眞一 2011）。

ものであり、これらの思惟は、1920 ～ 30 年代と 1960 年代の二つの時期を経て、「実学」概念として定着した。この概念は、当時「近代思想の萌芽」と言われ、「内在的発展論」の歴史学を裏付ける役割を担った（李坰丘 2012: 49–53、59–65）。「国民」概念に注目した姜東局も、「国民」概念は、「西洋との接触以前に、東アジア文明圏にそれなりに存在していた」と述べている。それによると、18 世紀中葉以降、中華秩序を絶ち、王を除外することで朝鮮人の間の平等と同質を生み出した「民国政治理念の国民概念」が、大韓帝国の国民概念として受容され、独立協会の西洋近代的国民概念との競合をもたらしたというのである（姜東局 2009: 251–60）。

もう一つは、「解放」以後の意味の変化を問うものである。宋承哲は、韓国概念史研究において重視すべきは「解放」以後であり、それは「分断体制下で民主化を目指す実践過程で、「リアリズム」をはじめとする「民族」「民衆・大衆」「国家」「統一」「民主」などの概念が、他では見られない方式で意味論的拡大をみせたから」と述べている（宋承哲 2009: 235–37）。このような主張は、「概念史研究が、特定の時期に接合するジャンル的属性を持つ」と考え、韓国の歴史において概念史研究の成果を明示しやすい時期を検討する過程から生じたものである。

3　展望

以上のように、韓国における概念史研究は、20 余年の間、研究方法論と理論的・経験的研究、参与研究者と対象時期などを飛躍的に拡大・発展させてきた。最近になって、韓国近代の経験の特殊性を反映した問題提起やアプローチが真剣に行われるようになった。これに関連して、第 2 節で述べた多様な研究を、今後、自らの問題提起によって経験的な研究として具体化し、その過程での活発な論争を通して、韓国概念史研究の方法論を確立していく必要がある。ここでは、このような今後の課題に関する個人的な見解を述べることにする。

まず、韓国近代の周縁性を考察する場合、開化期と植民地期を一つの枠組みとして捉えることが必要であると考える。今までの先行研究をみると、研究者は扱う概念や対象時期について、自身の属する学問分野の特性を反映する傾向が強かった。多少の隔たりはあるが、国際政治学分野では、多くの研究が開化期を中心に、「近代国際秩序の基本概念」を分析してきた。開化期には、近代概念の伝播と衝突、多様な影響が見られるため、大部分の概念研究がこの時期に集中している。一方、文学など他の分野では、開化期と同様に植民地期の概念動向にも着目し、様々なアプローチを行ってきたことは、これまでに述べた通りである。このような点を考えると、主権不在の植民地という状況は、概念形成において重要な変数として作用するとはいえ、開化期と植民地期の概念形成問題を完全に断絶したものとして見る必要はないということになる。開化期に識字層の議論で主導権を握っていた「国民」概念が、植民地化以後の議論では存立基盤を喪失し、主導権は「民族」概念

に移っていった。「国民」概念の形成と展開から見たこの事実こそが、韓国的特殊性を示すものであると考える。

この点に関して、植民地期概念研究の過程で発展し注目されてきた規範性・日常性・伝統性などを、「近代への過渡的要素」「概念の残滓」などとして消極的に把握するよりも、「近代性（modernity）との緊張関係」の次元でより積極的に意味づける必要がある。最近では、張錫萬が、植民地期の近代宗教としての天道教が抱える矛盾について言及している。東学教団は、社会的反感を払拭し宗教的自由を高めるために、1905年、天道教を宣布して、公・私領域の分離に基礎を置く近代的「宗教」（religion）概念を採択した。だが、当時の天道教には、実際には強い政治的志向が加わっていた（張錫萬 2013）。同様に、植民地期の朝鮮総督府は、宗教概念を活用して宗教的民族運動を抑圧しようとしたが、天道教は、これに抵抗しながら近代的宗教概念の受容と逸脱という境界地帯を渡ったのである。青野正明は、このような側面を、「類似宗教」概念を用いて検討した。それによると、植民地朝鮮では、朝鮮総督府が、天道教・大倧教などを取り締まるため、1910年の半ばに「宗教類似の団体」という新しい行政用語を作って使用し始めた。日本本国では、当初は宗教団体に対して申告制をとっていたためこのような概念はなかったが、次第に非公式の宗教団体を宗教行政の枠に留めておく必要性が高まり、朝鮮ですでに使用されていた「宗教類似の団体」という用語を取り入れた（青野正明 2013）。この研究は、概念形成の次元においても「帝国－植民地」関係は一方通行になりえず、植民地でのできごとが帝国の政策や概念形成に影響を与えることもあることを実証している。

次に、韓国における近代概念の歴史的意味を研究するうえで、開化期・植民地期から「解放」後への推移を、「概念の意味的拡大」という単線的な変化として見ることには、慎重になる必要があると考える。もちろん、「解放」後の社会運動の過程で活発な論争が行われ、そこから主要概念の意味が拡大してきたのは事実である。さらに、このような点で、「解放」後の概念研究は将来期待される分野であり、経験的研究を通して、これまでの空白を埋めうるものである。しかし、「意味の拡大」という視点は、あまりにも「基本概念」の属性に偏るものではなかろうか。「非基本概念の概念史」を志向するブラジルのホアオ・ペレス（João Feres Júnior）の問題意識とも通じるが、植民地期の「日常概念」に関する研究が一定程度蓄積された現在、先行研究を見ると、「意味の拡大」が、概念によっては「解放」後と同様、植民地期にもなされていたことがわかる。ある研究者は、特定概念が植民地期にはすでに定着しており、現在韓国で使われている意味と用例が見出されると述べている。仮に、植民地期には全般的な「意味の拡大」が進まなかったとしても、そのような意味の縮小や空白・減少自体が、韓国近代概念史の特殊性を把握するための重要な属性となろう。この点を積極的に捉え、観察し、議論する必要がある。概念史は、韓国近代の経験を適切に反映して初めて方法論的価値が認められる。植民地期は、20世紀の前半という単なる物理的時間を超えた位置を占めるからである。[13] したがって、開化期・

13　数年前、植民地支配を理解する新しいアプローチとして「植民地近代性」が提起された。これによる

植民地期と「解放」以後の様相を並行させて、意味の空白と拡大・縮小を研究し、これらを総合的に評価する能力が求められる。さらに、概念史の研究方法を固定的なものとして見ることや、既存の研究方法に合わせて活用することよりも、我々の歴史的経験に合わせて変容し続けるものと捉える積極的な姿勢が求められる。

17 ～ 18 世紀の意味の変化を位置づける作業も、今後、経験的研究成果が蓄積された後に本格的に取り組まれるべきではあるが、現時点では、当時の意味の変化が、近代的な概念の意味を決定づける規定的要因になりうるかどうかは疑問である。この問題に関しては、柳浚弼の研究が参考になる。すなわち、朝鮮後期の丁若鏞の言語関連の著述を分析したもので、それによれば、当時丁若鏞は、二重の言語秩序が動揺していた現実、つまり「漢字と漢文が言語生活の規範領域に位置し、その底辺に朝鮮語による生活言語の世界が置かれた」という現実を問題にしている。ところで、柳浚弼は、一部の研究者たちがこのような丁若鏞の指摘を「漢字（文）／国文」の対立として理解し、そこから近代国民国家の象徴性を発見しようとする傾向については異論を唱えている。なぜなら、言語における現実の混乱を収拾しようとする丁若鏞の意図は、「人間の言語活動の意味論的次元を超えた世界秩序の象徴体系としての言語を理解する流れ」に属するために、「一貫して人間の文化的営為の内部に帰属」する近代以後の言語論とは全く異質のものだからである（柳浚弼 2008: 202–205）。柳浚弼のこのような指摘を熟慮するならば、朝鮮後期に注目すべき意味の変化が発生したとしても、それが部分的な変化に留まるものなのか、伝統的な思惟体系を破るほどの変化をもたらすものなのかを、近代的な思惟体系と比較しながら判断し、明らかにする必要がある。もちろん、このような変化の規模にかかわらず、先に述べたように、朝鮮後期の意味の変化が、西欧近代概念の理解と受容にとって重要な変数となる可能性については、開かれた態度で見極めなければならない。

おわりに

韓国で近年概念史研究が盛んになっている背景はいかなるものか。ある学者は、その基礎をなす概念を本格的に研究し、韓国社会が近代的学問への理解を深める過程で生じたものと判断した。また他の学者は、そのような判断をさらに急進的に考えた。つまり、これまで韓国は、西欧に由来するほとんどの概念を、その正確な意味もわからぬまま、あたかも似合わない既製服のように自身の体を合わせて生きてきたが、新たな文明史的転換期を迎えた今日、自身の経験を反映する概念を模索すべきである、と。

20 世紀の韓国史を振り返ると、このような判断はおおよそ納得できるものと言える一方、逆説的にわれわれ自身を圧迫するものである。概念の歴史を研究する概念史は、研究方法論自体がヨーロッパに生まれ、発展してきたものである。そのため、自ずと「既製

と、「植民地は近代世界システムの最も重要な軸」であり、近代とは「植民地」なしに成り立つ概念ではない（尹海東他 2006）。

品」のように感じられてしまう。今回、「主体的概念史の模索」を取り上げたのは、このような問題と深い関係がある。今後、韓国における概念史研究の生命力は、概念史研究の成果が近代韓国の歴史像をどのくらい改め、新しい展望を提示することができるかにかかっていると考える。

参考文献

姜東局 2009「근대한국의 국민 / 인종 / 민족 개념」『근대한국의 사회과학 개념 형성사』창비
姜鎔勳 2012「이중어사전 연구 동향과 근대 개념어의 번역」『개념과 소통』9, 한림과학원
コ・ジヒョン 2010「일상 개념 연구」『개념과 소통』5, 한림과학원
金錫根 2002「19 세기말「Individual（개인)」개념의 수용과정에 대하여」『국제문제연구』24
金榮鎬 2004「근대 한국의 부국강병 개념」『세계정치（世界政治)』25-2
金容九 2008『만국공법』小花
金容稙 2004「근대 한국의 민주주의 개념：독립신문을 중심으로」『세계정치』25-2
キム・ジヨン 2010「풍속・문화론적（문학）연구와 개념사의 접속，일상개념 연구를 위한 시론」『대동문화연구』70, 대동문화연구원
金學頤 2009「개념이 적은 개념사 연구」『역사와 문화』17, 문화사학회
キム・ヒョンジュ 2005「김윤식 사회장 사건의 정치문화적 의미―‘사회’와‘여론’을 둘러싼 수사적 투쟁을 중심으로」『동방학지』132
キム・ヒョンジュ 2007「개념어 연구의 동향과 성과：언어의 역사성과 실재성에 주목하라！」『상허학보』19, 상허학회
金孝全 2009『헌법』小花
羅仁昊 2002「독일 개념사와 새로운 역사학」『역사학보』174
羅仁昊 2005「라인하르트 코젤렉과 근대」『서양사연구』33
羅仁昊 2007「레이먼드 윌리엄스（Raymond Williams）의 “Keyword” 연구와 개념사」『역사학연구』（구 전남사학）29
羅仁昊 2011『개념사란 무엇인가―역사와 언어의 새로운 만남』역사비평사
盧大煥 2010『문명』小花
ラインハルト・コゼレック／韓喆訳 1996『지나간 미래』문학동네
ラインハルト・コゼレック、クリスティアン・マイオ／黄善愛訳 2010『코젤렉의 개념사 사전 2―진보』푸른역사
柳浚弼 2004「19 세기 말‘독립’의 개념과 정치적 동원의 용법」『근대계몽기 지식 개념의 수용과 변용』소명출판
柳浚弼 2008「근대 계몽기 어문현실과 정약용―조선 후기 어문인식의 근대적 굴절양상 연구 서설」林熒澤・韓基亨・柳浚弼・이혜령 외『흔들리는 언어들』성균관대학교 출판부
メルビン・リクター／宋承哲・金容秀訳 2010『정치・사회적 개념의 역사―비판적 소개』小花
文京連 2011「식민지 근대와‘취미’개념의 형성」『개념과 소통』7
朴根甲 2011「단재 신채호와 역사의 발견」『역사학보』210
朴根甲 2012「‘근대’의 의미론―라인하르트 코젤렉과 한스 블루멘베르크」『개념과 소통』9, 한림과학원
朴根甲他 2009『개념사의 지평과 전망』小花

朴明圭 2009『국민・인민・시민』小花
朴相燮 2004「근대 주권 개념의 발전과정」『세계정치』25-1
朴相燮 2008『국가・주권』小花
朴相燮 2009「한국 개념사 연구의 과제와 문제점」『개념과 소통』4, 한림과학원
朴贊勝 2010『민족・민족주의』小花
ヴィッヘルム・ヤンセン／權善亨訳 2010a『코젤렉의 개념사 사전 4 —전쟁』푸른역사
ヴィッヘルム・ヤンセン／ハン・サンヒ訳 2010b『코젤렉의 개념사 사전 5 —평화』푸른역사
孫洌 2004「근대 한국의 경제 개념」『세계정치』25-2
宋承哲 2009「미래를 향한 소통—한국 개념사 방법론을 다시 생각한다」『개념과 소통』4, 한림과학원
申旭熙 2004「근대 한국의 주권 개념」『세계정치』25-2
梁一模 2011「한국 개념사 연구의 모색과 논점」『개념과 소통』8, 한림과학원
ウェルク・ピーシー／安三煥訳 2010『코젤렉의 개념사 사전 1 —문명과 문화』푸른역사
ウェルク・ピーシー、ディター・クロー、ロドルフ・パルター／黃勝煥訳 2010『코젤렉의 개념사 사전 3 —제국주의』푸른역사
尹海東 2010「정치 주체 개념의 분리와 통합」『개념과 소통』6, 한림과학원
李坰丘 2012「개념사와 내재적 발전 : '실학' 개념을 중심으로」『역사학보』213
李相信 1986「概念史의 理論과 硏究實際」『역사학보』110
李眞一 2011「개념사의 학문적 구성과 사전적 기획 사이에서—『코젤렉의 개념사 사전을 중심으로』」『개념과 소통』7, 한림과학원
李幸勳 2011「'과거의 현재'와 '현재의 과거'의 매혹적 만남—한국 개념사 연구의 현재와 미래」『개념과 소통』7, 한림과학원
李憲美 2004「대한제국의 영웅 개념」『세계정치』25-2
梨花女子大学校韓国文化研究院 2004『근대계몽기 지식 개념의 수용과 그 변용』소명출판
梨花女子大学校韓国文化研究院 2006『근대계몽기 지식의 발견과 사유 지평의 확대』소명출판
梨花女子大学校韓国文化研究院 2007『근대계몽기 지식의 굴절과 현실적 심화』소명출판
林慶花 2012「식민지 조선에서의 창가, 민요 개념 성립사」『개념의 번역과 창조』돌베개
張錫萬 1992「개항기 한국사회의 "종교" 개념 형성에 관한 연구」서울대 종교학과 대학원 박사학위 논문
張錫萬 2013「日本帝国時代における宗教概念の編成——宗教概念の制度化と内面化」磯前順一・尹海東編『植民地朝鮮と宗教』三元社
張寅性 2004「근대 한국의 세력균형 개념 : '균세'와 '정립'」『세계정치』25-2
張寅性 2009「근대한국의 세력균형 개념」『근대한국의 사회과학 개념 형성사』창비
鄭容和 2004「근대한국의 주권개념의 수용과 적용」『세계정치』25-1
青野正明 2013「朝鮮総督府の神社政策と「類似宗教」——国家神道の論理を中心に」磯前順一・尹海東編『植民地朝鮮と宗教』三元社
崔丁云 2002「서구 권력의 도입」『국제문제연구』24
河英善 2002「문명의 국제 정치학 : 근대 한국의 문명 개념 도입사」『국제문제연구』24
河英善 2004「변화하는 세계와 개념사」『세계정치』25-2
河英善 2009「변화하는 세계와 개념사」『근대한국의 사회과학 개념 형성사』창비
河英善他 2009『근대한국의 사회과학 개념 형성사』창비
翰林科学院 홈페이지（http://has.hallym.ac.kr/）

韓承完 2010「박상섭『국가・주권』—현실과 유리되지 않는 토착적 개념의 형성을 위한 조건」『개념과 소통』5, 한림과학원
許洙 2011a「‘대중’을 통해 본 식민지의 전체상—주요 잡지의 ‘대중’ 용례분석」『식민지 조선, 오래된 미래—개념과 표상으로 식민지 시대 다시 읽기』 푸른역사
許洙 2011b「집합적 주체들의 향방—‘국민・인민・민중・대중’을 중심으로」『식민지 조선, 오래된 미래—개념과 표상으로 식민지 시대 다시 읽기』 푸른역사
黃鍾淵 1997「문학이라는 譯語」『동악어문논집』32
尹海東・천정환・許洙・黃秉周・李庸起・尹大石 2006『근대를 다시 읽는다 1・2—한국 근대 인식의 새로운 패러다임을 위하여』 역사비평사